

---

# 事件発生

吉沢拓磨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
事件発生

【Nコード】  
N2964Z

【作者名】  
吉沢拓磨

【あらすじ】  
あと少しで目的地、というところまで来た二人。

俺達が村を出て、そろそろ一月。冬もだんだん深まってきた。

「ルリ、王都まであとどれぐらいかかりそうだ」

「そうね。町が一つあってその次だから、本当にすぐよ。…そんなに気になる？」

「…まあ、ちよつとな」

「あんたがそこまで気にするなんて、よっぽどよね」

「…五月蠅い」

この時俺達は、森沿いの街道を通っていた。話すのに気を取られて、周囲への注意を怠ってしまっていた。

この事が原因だった。

近くの町の門限に間に合わなかった俺達は、仕方なく近くで野宿することにした。

「…寒い」

「今飯作ってるから待て。焚火でもしておけよ」

「…口は達者なんだから」

「五月蠅い、純粹培養野郎」

「失礼ね！」

暗闇の中で焚火の炎だけが赤々と光っている。静かだ。

「…静かすぎる」

「そう？特に変わったようには思わないけれど」

「変に気配が止められている。何か近くにいるぞ、これ」

「何かって…」

「こんな所だと山賊しかいないだろ」

狙われている。恐らくこの前からの奴らとは無関係に狙われている。

その日は、ルリの式を見張りにして早々に寝た。

そこまでは良かったんだ。

その日の真夜中。ビリビリとした殺気で目が覚めた。

「来やがった…」

ルリも目が覚めたらしい。何時でも対応できるようにしている。

「式は」

「とつくに消されたわよ。…来るよ。死なないようにね」

「お前こそ」

相手の攻撃が始まった。

馬は先にルリの式が避難させている。

多勢に無勢ってやつか。俺は自分の対応をするだけで手一杯だ。

ルリも、こつちにまで気を割けないらしい。誰かの剣を避けている間に、他の奴が手を出してくる。俺の手は既に又ル又ルだ。

「何なんだよ、つたく」

あちらこちらで悲鳴が上がる。ルリにボコられた奴らだ。一方の

俺はへぼなので、皆こつちによって来る。

困まれた。親玉は一番外側だ。

「…死んでたまるかよ」

気合を入れ直して、剣を構え直した。

さつきからクラブの姿が見えない…。困まれちゃったから、大丈

夫かなあ。

「異次元への旅！」

自分の周りにいる奴らは、倒しても倒してもどんどん湧く様に出てくる。はつきり言って鬱陶しい。…まさか死人？！

「ダツチエ！」

冥府の死者が、死んだはずの者たちを次々と消滅させていく。消された奴らは、輪廻の輪から外されてしまう。

狭い空間だから、倒すよりも速いスピードで俺がボコボコになる。  
「離れよ」

親玉がようやく口を開いた。

「若者よ、私と一騎打ちをしてみようではないか」

「一騎討ち……だと」

「そうだ。お前の連れの女を賭けて。お前が勝てば、我々はすぐにここから立ち去ろう。ただし、私が勝てばその時は、分かっているだろうな」

「ルリと荷物奪って、俺は殺す、と。そうだな？」

「そういう事だ。どうする、やるのか、やらないのか」

ルリが捕まったのはとんだ誤算だった。

だが答えは一つしかない。

「良いよ、やってやるうじゃねえか」

俺の周囲で失笑が起こった。

「攻撃は一撃のみ。追撃は無し。味方による手出し、手助けも無用。  
良いな」

「ああ。早い所終わらせよう」

俺が三つ息を数えた所で親玉が走ってきた。俺は、その時になつてようやく構えた。

「臆したか！」

「いいや。力を温存したんだよ！」

瞬発力に物を言わせてスピードを上げる。

音が消えた。そしてざわめき。

どっちが勝ったのか。それはすぐに分かった。

俺が、勝った。

相手側の子分共は悲鳴と共に走り去った。親玉は既に何処かへ行っている。

「あの親玉も死人だったのよ。正確に言うと、自分の体を操ってい

た、と言った方が良いかもね」

「…ルリか」

捕まえられていた時に抑えられていた所を気にした様子で、いつの間にかルリが横に来ていた。

良かった、無事だったんだ。

力が抜ける。音が消える。

自分が笑っているのだけ。分かった。

今までだったら決して見る事の無かったような柔らかい笑みを浮かべたと思ったら、横にいたクラブから力が抜けた。

「ちょ…大丈夫?! ねえ、クラブってば!」

地面に激突する前に慌てて体を支えるけれど、ちっとも反応しない。

呼び戻しておいた式に後から追うように言いつけて、昨日の内に入る予定だった町へと急いだ。

気付くのが遅れた…。間に合えばいいけれど…。

町に着いた時、ちょうど門が開く時だった。

「ちよつとの間だけで良い、中に入れて下さい!」

「…話は分かった。手伝える事はやるう。何をすればいい」

「救急セット、お願いします」

「お前達、聞こえたな。手の空いている者は、非常時だったって、救急セット借りて来い!」

「ラジャッ!」

若い警備兵の人達が散り散りになって町へと走って行った。私はそれを横目で見ながら、式に手伝ってもらいつつ術で傷を塞げるものから塞いでいった。

私達がついた時に対応してくれた、この警備兵の隊長さんは、とても親切だった。私達を中へ入れてくれただけでなく、手伝いまでしてくれている。

「山賊かね」

「というか死霊使いですね。私が捕まっちゃって、こいつとそいつらの親玉が一騎打ちして。勝ちましたんだけど…」

「そうか。…大丈夫だ、きつとこいつは目を覚ます」

「どうしてそう言い切れるのですか」

「お前さんが必死で治そうとしているのに目を覚まさなかったら、こいつは馬鹿者だよ」

「…そうですね」

「で、この後の予定は」

「王都へすぐに向かいます。止血して、傷を塞げば何とかありますし。元々王都へ行く予定だったんです。知り合いもいますので」

「そうかい。…王都へなら、すぐそこにある丘にあるトンネルを抜けてくと近いぞ。大丈夫、馬も通れる」

「…ありがとうございます」

軽くお昼ご飯をよばれて、すぐに私は言われた道を通って王都へと向かった。

…何処か暗い場所を、俺は一人で漂っていた。周りには誰もいないし、何も無い。無機質な空間だ。自分が生きているのかそうじゃないのか、それすらも分からない。分かった所でどうしようもないのも事実だが。

「あらルリちゃん、久しぶりじゃない。…どうしたの、切羽詰まってる」

「おば様！部屋、すぐに一つ貸して下さい。布団のある部屋。この馬鹿、寝かせたいんです」

王都に来て一番に会いに行ったのは、私が世話になっている親戚の家。ここなら、余計な疑いをかけられる事も無いはず。少なくとも時間は稼げる。

「知りあいかい？」

「ええ、一緒に来たんですけど、いろいろあつて…」

「そうかい。好きに使いな。誰にも何も言わないし何も言わせないから。それから、ルリちゃん少しは休みなさいよ。疲れ切っちゃつて。大丈夫だから、ね」

「はい」

確かにまともに寝てないわね。少し横になつても問題無いか…。会いに行くのは何時でも出来るんだし。

暗闇の中に光が灯った。小さな、今にも消えそうな、ユラユラ揺れる光だ。手を伸ばしても掴めない。手の中を摺り抜けて行つてしまふ。

まるで人の心だ。人の心は掴める物じゃない。通り抜けて行つてしまふものだ。今まで俺は、掴まれる事も掴む事もしてこなかった。いつも何処かを漂っていた。そう、今みたいに。

止まる所の無い俺にとって、居場所なんてもちろん無かった。施設にいた時も、常に一人で部屋の片隅に座り込んでいた。壁、見える壁も見えない壁も両方、周囲にあった。だから、受け入れられる心配されるって感情はものすごく分からなかったし、今でも良く分からないでいる。一人ですつと生きてきた俺にとって、それはとても難しい課題だ。

いつの間にかグッスリ眠っていた。目が覚めたら、外は夕暮れ時。王都が最も綺麗に見える時間帯。部屋の窓からも日の光が差し込んできている。温かいオレンジ色。

「…クラブ、死なないでよね」

誰かが何を言おうと、私はこの馬鹿に生きていてほしいんだと思う。

そつと握った手から伝わってくる温かさ、微かに息が聞こえてくるだけが、こいつが生きている証。でも、今はそれだけしか信じ

られない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2964z/>

---

事件発生

2011年12月10日14時48分発行